北條早雲 三

早乙女貢

文春文庫 230—5

北條早雲(三) 定価 500円

1980年7月25日 第1刷
1980年8月10日 第2刷

著者 早乙女貢
発行者 杉村友一
発行所 株式会社文藝春秋
東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102
TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが、小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本 Printed in Japan

北　條　早　雲

目次

宇津谷峠　7
法栄長者　68
城取り　109
男の道　182
野望　248
駿府の城　293
塩湯の客　311
道灌来る　365
伊豆へ　404

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

北條早雲

(三)

宇津谷峠

今川弥三郎春忠が不埒な思案をめぐらしているとは知らぬ伊勢新九郎は、その宵、夕闇を利用して府中へ舞い戻っていた。

寿々女は生きているのか、死んだのか。まずそれを捜るのが先決だった。

混乱の城下は数箇所から火ノ手があがっていた。

範満の輩下が放火したのか、合戦の混乱を利用しようとする無頼の連中が火をつけてまわったのかわからない。ともあれ、範満の勢力下となった城下へ新九郎が潜入するには、幸いだった。

（どこから探したらいいか）

漫然と歩いてもぶつかる可能性は少ない。

（もし生きているとすれば、あいつの知っている所だ）

だが、その点も、なにしろ黒丸はこの府中に長い。野良犬のようにそこらを歩いていたから、知っているところも多いにちがいなかった。

（巣の多いやつだからな）

あの舟山には、まず戻らないだろう。

新九郎には、寿々女がどうやって発見されたか、事情はわからないが、姿を消したのが舟山だから、範満方には舟山の隠れ小屋のことは洩れているはずだ。今度見つかれば、寿々女はいいとして、黒丸は殺される。

新九郎は、黒丸とまわったあたりを考えてみた。あの雷神うらの細民街、湯女風呂、六道ノ辻、あの闘鶏をやっていた露地――

（そうだ、はじめてあいつに声をかけられた寺の門前……）

新九郎の知らない黒丸の知人もいるかもしれない。

夕宵の中に、あちこち、要所には篝火をたいて、武装の足軽たちが、通行人を誰何している。混乱の中では、反抗する者は問答無用で斬られても突かれても文句はいえないのである。新九郎は、その目を避けて裏小路を歩いた。

誰もいないと思った角で、ふいに声をかけられた。

「おい、どこへ行く」

声は下からだった。声には酒が匂った。

地べたに坐りこんで、酒壺を抱えている雑兵だった。いずれ、そこらの酒倉から徴発して来たのであろう。

「そこまで」

と、軽く応えて行き過ぎようとした。が相手は、そうはさせなかった。

「やい、待て」

酔いしれた声が、ふと強いものに変った。生酔いだったのだろう。

「新九郎だな、伊勢ノ新九郎」

言いざまに酒壺が飛んできた。とっさに身をひねって避ける。壺は築地塀に当って、ぐわっと砕け、酒がしぶいた。

その体のゆらめきを目がけて槍の直穂が突っかけてきた。酔っているとは思えぬ、必殺の鋭さであった。

酔っていたのは、本当だろう。が、遠篝火の仄明りに新九郎と知って勇気が湧いたのも事実だろう。

いまや範満方にとっては、一に竜王丸、二に北川どの、三番目に新九郎の首が狙い目にちがいなかった。

いや、範満の憎しみからすると、新九郎の首は、北川どの以上の価値かもしれない。雑兵にとっては、ここが出世の好機、と、即座に閃いたのではないか。槍先には、欲がこもって鋭い。

「たわけが」

新九郎は身をひねって、抜き討ちに斬り下げている。斬ったあと、とどめも刺さずに走った。

雑兵の一人や二人、首をあげる意味はない。第一、もはや首をとって戦功を誇示する時機は過ぎていた。

「ま、待てい……」

苦痛に濁った声が背中にからみついたが、追う気力はあるまい。

ただ、その男の口から、新九郎の潜入が知れるかもしれない。と思うと、息の音を止めてきたほうがよかったが、ただそのことのために殺してしまうのは気が進まない。

(見つからなければいいのだ)

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

新九郎は走りながら思った。

暫くいって気がついてみると、小路に入りこんでいる。向うで燃えている火明りで大銀杏が見え、大体の位置がわかった。

このすぐ左手が雷神で、裏側一帯のごちゃごちゃと建てこんだところが、泥亀のいる下町だ。

（逃げこむには、あそこが一番いいわけだが……）

戦さは勝負がついている。

今川の天下は範満の手に帰したとなると、泥亀はじめ、その輩下はもとより、金儲けなら、火つけ盗人何でもやる連中にとって、竜王丸や寿々女を範満に引き渡して恩賞に預かるという方向に頭が働くだろう。

抜け目のない連中だ。そういうことにかけては、異常に頭がまわる。

黒丸が新九郎の腰巾着になって、すなわち竜王丸側だということは泥亀以下みんなよく知っている。牛飼いや雑仕（ぞうし）の小者や、水仕（みずし）の女たちなど、屋形ではたらいていた者には、寿々女の存在の価値もわかっている。

寿々女と黒丸がうろうろしていたら、まず安全とは思えない。すぐにも魔手がのびるにちがいなかった。

（どこにいるのか……）

いよいよ気がかりだった。

黒丸も愚かではないから、敏感に察して、郊外へ逃げたかもしれない。それなら一応安心だが、しかし、寿々女を連れて帰らねば、竜王丸たちが泉ヶ谷で安心して隠れて居られない。

新九郎はあてもなく夜の底を歩きまわった。

暗い街に来たとき、カタリと音がして一軒の家から、白い顔が出た。
「新九郎さま、どうしてここへ？」
名を呼ばれたとたん、新九郎の手は刀の柄にかかっていた。無言で振りかえっている。
「あたしですよ、新九郎さま」
暗い中に白い顔が動いている。板蔀を手であげたまま、あたりに気をくばっているのは、若い女だった。
灯をわざとともさないでいるのは、混乱につけこむ悪い連中に目をつけられぬためだろう。
「あたしですよ、さ、早くお入りになって」
「そなたは？……」
誰か。馴れ馴れしく呼ぶだけの親しい相手となると、そう多くはない。
「戸を開けますから、早く」
ばたんと、板蔀がしまった。
女の声に聞きおぼえがあるようであり、その暗い中に白い花が咲いたような顔も、記憶に古くない。
（誰だったろう）
急には思いだせなかった。
戸が開いた。板戸である。新九郎は手をつかまれた。優しい白い手がついと延びて手をつかんだのだ。女に引きこまれたようなかたちになった。
「そなた？」
「ほほほほ、もうお忘れ」

「あ、小萩か」
「あい」
あの湯女だった。
思いだした。いつか楽しんだ肌である。忘れたわけではないが、ここは湯女風呂のあの女小屋ではない。同じ場所なら忘れることはないが、意外な場所だったから、まさか小萩とは思わなかったのだ。
「――あそこはどうした、逃げだしたのか」
「ええ、いやなやつばっかり、どんどん押しかけてきて、もうそれこそ、ひどいんですよ、銭を払うどころか、湯に入るより女を抱く方がいいなんて」
「……」
「臭いやつばっかり」
そしてまだ新九郎の手を放さずに上に引きあげると、暗いなかで、坐るところが決っているように、円座を奨めた。
「ほほほほ、ほんに懐しい、新九郎さま」
「懐しいな。だが、こう暗くては、顔も見えぬではないか」
「顔なんか見えなくても、いいじゃありませんか」
「いや……」
「どうせ、男に女。ね、からだでお話ししましょうよ」
小萩は、膝に乗るように新九郎の広い胸にもたれかかってくる。
「まあ、待て、そんなことをしてはおれんのだ。おれには用がある」

「いつも、あんなことばかり、新九郎さまは、いつも用がおありねえ」
「戦さの最中だぞ、そなたを抱いていては首を斬られてもわかるまい……」
そう言ったばかりへ、表を、大きな声で喚きながら走ってゆく一団があった。
よかった。一足ちがいで、見つかるところだった。
戦乱は庶民の生活を変える。殺戮の嵐を免れた者も、劫火を避けた者も、いままでの生活の基盤を失ってしまう。
湯女風呂の女たちに襲いかかる勝利者たちの醜い姿を、新九郎は思った。その難を避けて来たこの女が、急に哀れに感じられた。
「だが、よく助かったな、早くこの城下から立ち去った方がいい」
「はい。新九郎さまは」
「おれは、用がある」と、新九郎は苦笑した。「そなたは、何もこの城下にいなくてもいいだろう、それとも借銀があるのか」
「はい。でも、戦さで棒ッ引になるでしょ」
小萩は舌を出したようだ。闇に目が馴れてくると女の表情が漸く見えてきた。小萩はくすっと笑った。
「戦さは厭だけど、借銀が棒ッ引になるのだから、万更、悪いことばかりじゃありません」
「徳政ということもあるが、とにかく、命だけは大事にすることだ」
「はい、ですから……抱いて下さいまし」
小萩は男の膝に手を置き、上半身をくねらした。衿が弛み、乳房が半ばあらわれた。
闇が女を大胆にしているのだろう。おのれの魅力を充分に知っている女の、あふれるような媚

態には、新九郎も抗しかねた。
「ねえ、あれっきり一度も来て下さらなかったのですもの」
「行こうとは思うたが」
「うそ。新九郎さまは、北川どのとほんとうの兄妹じゃないらしいって、お侍衆が話していました」
「なんだと!?」
「怒っても駄目。……でもいいんです。新九郎さまが出世なされば、小萩だって嬉しい」
「その、おれのことを申していたやつは、誰だ」
「知りたい？」小萩は、下から凝っと猫のような目で見上げて、「知りたいのだったら、抱いて」
「おいおい、ひきかえか」
「ええ、こんな御時勢ですからね、タダじゃア言えません」
その間も、女の手は、男の股間に動いているのである。そうしながら、新九郎の掌を導いて、おのれの豊かな胸に当てさせているのだった。
「ねえ、あたしだって……」小萩はあまい声で言った。
「一度くらい、商売抜きで楽しみたい」
「取引だと申したではないか」
「いいえ、あの湯女風呂の割部屋ではなくて、ね、ここだったら、ここでこうして新九郎さまに抱かれたら、ほら、夫婦のような気持になれるじゃないか」
客に買われる女ではなく、好きあった男と女の関係で契りたいというのだ。そんな女の心情はやはり哀れであった。

新九郎ははじめて女の下肢をひらかせた。

果てののち――

小萩はいつまでも新九郎を放そうとはしなかった。

「このまま、凝っと……ね、凝っとしていたいの」

湯女としてではなく、一人の女として新九郎ほどの男に愛撫された喜びが、小萩を夢の世界に誘おうとしている。

このまま安らかに眠りたい思いと、眠ってしまっては、新九郎に去られてしまうというおそれと、そして、眠りの中に溶けこませてしまうには、惜しい感情が、こもごもに、女の胸の中を揺曳しているのだった。

夢を見ようと思えば、嘘でも見られる。他の男に抱かれていても、新九郎と思えばいい。

どんな嫌いな男だって、眼を閉じてしまえば、それまでだった。歯くそをいっぱいためた黄いろい汚ない歯の口で、女の秘所を弄ばれても、眼を閉じて新九郎にされていると思えば、それなりに気持は誤魔化せるものなのだ。

新九郎の爽やかな口を思えばいい、清潔な皓い歯並びを思えばいい。いくばくかの銭で肌の切り売りをする女たちには、そういうわざが身についているのだった。

そうでなければやりきれない。きらいな男を一々、拒んでいては商売にならない。それだけに、好きな男に抱かれたいという思いは切実だった。

その思いがかなえられたのだ、現実の中で。

小萩は新九郎の背にまわしている手を静かに動かした。男の背をなでている。このからだは、間違いなく新九郎さまのものだと思った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com